

第17回全国大会に向け勉強会実施中

来年のテーマは「18歳は大人か？私たちはそのように子育てしているのか」(仮)を予定。大会に向け、渋谷区くみの広場でアンケート調査(p5掲載)を実施。18歳選挙権制度がスタートし、今後、少年犯罪の年齢を18歳に引き上げるか、酒や、タバコはどうするか、親の承諾なしに金を借りることができるのか、海外の状況などを含め様々な視点から議論を重ねています。

★パトリック・フーさん(カナダ)を囲んで

日時：平成29年12月12日(火)午後6時～
場所：東武ホテル「竹園」



★加藤諦三先生をお招きして

日時：平成29年12月22日(金)午後6時30分～
場所：おやじ日本事務所

昨年開催された第15回全国大会について内外教育で紹介

平成29年7月25日内外教育

パラスポーツの意義を考える



認定NPO法人「おやじ日本」理事長、竹花豊元(東京都調布区)はこのほど、東京都渋谷区の間区文化総合センター大和田で第15回全国大会を開催した。約500人が参加。2020年東京五輪・パラリンピックの開催を3年後に控えていることから、テーマを昨年に引き続き「パラスポーツの未来(II)」とし、「パラスポーツから元氣をもらおう!」をサブテーマに、デモンストラションを交えながら、18年に韓国・平昌で開催される冬季を含め、随時若く共に進める障害者スポーツの意義について話し合った。

「おやじ日本」では、中学校1年生の中野りなさんが東日本大震災の湯水で製作されたバイオリンを演奏。6年に神奈川県立湘谷義塾学校大和東分教室の生徒で結成されたパフォーミンググループ「はつばオウルスターズ」の12人(現任全員社会人)は、振り込め詐欺に注意を呼び掛けるダンスパフォーマンスを披露した。

続いて、日本パラリンピアンズ協会副会長の日方邦子氏が「冬季パラリンピックがやってく



る」と題して基調講演を行った。日方氏は1994年のノルウェー・リレハンメルから2010年のカナダ・バンクーバーまで5大会にアルペンスキー競技で出場し、日本人初の金・98年長野、を含む10個のメダルを獲得。10年に日本代表を引退し、平昌大会は選手団長として参加する。

日方氏は、長野で金メダルを取ったのは、たくさんの方が応援してくれたから、と振り返りながら、平昌大会でも選手にエールを送るよう呼び掛けた。冬季の全6競技について解説し、アルペンスキーは立位、座位、視覚障害の3種類があることを紹介。いろいろな人がパラスポーツを楽しむ

長谷部氏は、区内の施設が東京大会の会場になることも踏まえて昨年、区の長期基本構想を20年ぶりに改訂したことを紹介。人口が増加し、情報技術(ICT)も進展する20年後を展望して「ちがいはからに変わる街、渋谷区」を基本線として掲げており、ダイバーシティ(多様性)やインクルージョン(包含)へと市民の意識を変えるチャンスとしても、パラリンピックを応援したいと表明した。

長谷部氏は、二つの特徴がある。19歳の時の長野大会でアイススレッジホッケーに出会い、米上が「僕のアイドルだ」と直感したという。06年のイタリヤ・トリノから2大会連続で日本代表に選ばれ、バンクーバーでは準決勝でゴールを決め銀メダルを獲得。現在はアスリートとしてだけでなく社会起業家としても活躍する。

小さな解決策が社会を変える

マクドナルド山本氏が3競技に取り組んだのは、大日方氏のようなパラリンピアンに憧れたからだったという。その大日方氏も、長野を控えたリレハンメル大会に抜かれて、「出会ったパラリンピアンが格好良かった。この人みたいになりたい」と思った。と振り返る。

スノーボードが普及する前にはスキー場から「ソリは駄目」と言われてチェアスキーを拒まれた経験もある大日方氏は「長野大会がそんな雰囲気を変えた」と実感する。しかし、盛り上がりは4年に一度のことではない。現在のパラスポーツに対する関心の高まりも、東京招致が決まってきたからという。

だからこそ、見る側の意識が重要だ。カール氏は「初めてパラリンピックを耳にしたのは長野だったが、その後は聞かなくなった。やはり(12年の)ロンドンの方が大きい」と指摘。東京でも日本を挙げてパラスポーツを盛り上げることが期待をかけた。ぜひ渋谷区にスポンサーになってほしい」と笑われた。

これを受けて長谷部氏も、意識の変化を東京大会のレガシー(遺産)にしたい意向を示し、ロンドン大会の超人たちに会いに行こう、というポスターを引合いに「次の世代にどう伝えるか大切だ」と訴えた。

6月に渋谷区教育委員に任命された大日方氏は、「子どもの方が大人より見たもの、聞いたものを受け取る力が強い」として、難しいことを伝えるよりも、実際に競技をやってみてもらったり、選手に話をしてもいいことが重要だと強調し、選手に紹介した。

そんなパラスポーツに理解を広げるためには、アスリートが積極的に外に出ていくことが期待される。大日方氏が以前、スキー場に拒まれた際にも「モンストレーションさせて」と解り込み、リフトにも乗れることを実証しながら理解を得ていったという。「一緒にやってみよう」という大きな一歩になっていく。機会が増えれば、どんどん変わっていく」と述べた。

このように期待している」と結んだ。東京都立光明学園高等部の生徒3人らが夏季競技のボッチャをデモンストラション(写真)した後、パネルディスカッション「パラリンピアン大いに語る!」が行われた。登壇したのは大日方氏のほか、NPO法人ロムニエ(NPO「デイリースタッフ」)代表の上原大祐氏、タレントのダニエル・カール氏、渋谷区長の長谷部健氏、日本財団パラリンピックサポートセンター推進戦略部長岡田敬二氏、NHK解説委員の早川夫氏がコーディネーターを務めた。

マクドナルド山本氏は生まれつき二分脊椎症の障害がある。9歳から水泳を始め、留学時代に取組んだアイススレッジホッケーではカナダ女子代表にも選ばれた。帰国後の現在は、パラ・パワースポーツで東京大会の出場を目指している。日本財団ではパラリンピックの教育普及事業を担当しており、国際パラリンピック委員会(IPCC)公認の教員「EIPROBIE」などを紹介した。

東京生まれで横浜育ちという雪のない環境で過ごした大日方氏は、20年ほど前のスキーブームで初めてスキーバスの乗り、スキー場に感激した。それが選手になった原動力と振り返った。

カール氏は、米カリフォルニア州の父親が高齢者スポーツとして米版ボッチャの「パッチ」を業しんでいることを明かしながら、ボッチャについても「とにかく楽しいスポーツ。やってみよう」と参加者に勧めた。

これに対して長谷部氏が「マジリタイ(多数派)の健常者の側にも意識の変化が必要だ」と応じると、大日方氏は「何のためにもろいのかを一緒に考え、解決するのは新しいのが生まれていく。小さなソリューション(解決策)が社会を大きく変える」と、パラリンピックは分かち合っていくと述べた。

カール氏も、高校生の時に交換留学生として初来日し、英語指導助手(AET)助手として山形県で3年間働いた経験から「40年前は外国人が歩いていただけで田舎は大騒ぎだった」と振り返り、国際化と同様、時間をかけて意識を変えていく必要性を訴えた。上原氏も「パラアスリートが自分たちから後継者を育てていく、(健常者の)皆さの固定観念を壊していきたい。一つのアイデアや工夫で解決できるのに、"単一"だから駄目"などと言ってしまっただけ、もったいない」と応じた。

大日方氏は、パラリンピックの父とされるルイ・トワイヒブ・グッドマン卿の「失われたものを数えるな。残っているものを最大限に生かせ」という言葉を引きながら、「残された機能を最大限に生かす」とできることになると、それがパラリンピックだ、皆さんと一緒に、いい未来をつくらせていきたい」と呼び掛けた。(遊説教育員 教育ジャーナリスト)